



もの



そのもの

川崎ゆきお

「彦さんについて聞きたいのですが」

相当な山里だ。標高そのものが高い。もし観光地なら天空の村と言うだろう。鈴木はその村へやって来た。

「あんた誰かね。どうして彦さんを知っておる」

「この里の人と同級生なのです」

「誰だろう」

「大岩手君です」

「ああ、あそこの息子か、で、それで彦さんを知ったわけかい。余計なことを喋るねえ、あの息子は」

「山に彦さんがいると」

「ああ、いるよ」

「山の神ですか」

「まあ、そうじゃな、今でもよく噂は聞く。彦さんが来たとか、彦さんが出たとか」

「その彦さんは何処におられるのですか」

「お山だ」

「どの」

「うーん、ここがそもそもそのお山なんだな」

「はい、駅から小さなバスに乗って、ここまで来ましたが、かなり登ったような気がします。エンジン音が凄かったです。こんな山の上に村があるなんて、奇跡のような」

「奇跡とは大袈裟な、昔からあるよ。この村は」

「平家の落人なんかが住んでそうですねえ」

「そうだね、ここまで来れば、世間とは随分離れるかもねえ」

「それで、彦さんなのですが、何処に」

「さあ、この周辺の山にいるはずだけどね」

「そうですか」

「見たいかね」

「はい、わざわざそれで、来たのですから」

「あんた、民俗学なんかに興味があるのかね」

「いえ、それほどは。でも大岩手君が面白うそうに語るもので」

「どんな」

「お供え物を置くと、いつの間にかなくなっていたとか。谷で声を出すと、違う言葉で返ってくるとか」

「ああ、そうだろうねえ」

「出来れば、いそうな場所を教えてくださいませんか」

「あまり言いふらさないと約束するならね。そうでないと、彦さんに潰されますよ」

「はい」

★

彦さんが今現在、何処にいるのか村人が調べてくれたので、その山へと向かった。それほど遠くはなく、お椀を伏せたような穏やかな山だが、その綾線はぎざぎざしている。原生林に近いのか、色々な木が生えているのだろう。

その山に踏み込むと、岩や石がごろごろしている。これでは植林には適さないだろう。教えられた場所は中腹の岩場にある洞窟だった。

「ああ」

まだ若そうな人だが、猿のように見える。顔の髭を剃っていないためだろう。髪の毛は後ろで括っている。衣服は普通だ。その辺りで売っている今風なもの。

「あなたが彦さんですか」

「ああ」

「山の神ですか」

「私で何代目かになるなあ。血は繋がっていないが」

鈴木はピンときた。山人なのだと。つまり山の民だ。

「今日は何、イノシシの肝ならあるけど、鹿はない。熊は滅多にない」

「そうじゃなく、お話しを」

「私は元々の彦さんじゃない。まあ、身元は明かしたくないが、下では暮らせん」

「逃亡者のような」

「まあ、落ち武者のようなものかな」

「はい」

「先代の彦さんの跡を継いだ」

「先代とは、その前まで彦さんをやられていた人ですね」

「そうだ、もう体がえらいので、彦さんは出来ないらしくてな。私とバトンタッチさ」

要するにホームレスなのかもしれない。

「私は道々の者になったが」

「え、何になったって」

「道々の者だよ」

「路上の人ですね」

「ここは山々の者の物なのだが、もういなくなった。かなり前の話だ。明治の前ぐらいまではいたらしいがね。だから山々の者じゃなく、道々の者からバトンを渡された」

「あ、はい」

「まあ、ここでは神様だからね。しかし、こちらも何かせんといかん。しかし、神じゃないから、そんな力はない。それでキモ取りや薬草採りをしておる」

鈴木はこれで得心したようだ。ものそのものと対面出来たので。

了

